



緑の教室

細く長く回廊するガラスの輪。  
 外縁という学校の中で最も地域から近い存在に空間を創造する。  
 一般的に外縁には鉄柵が用いられ、その重く暗い素材によって、学校は外部から強く遮断されている。その流通した誤りともいえる概念を取り払い、外縁に大小様々な大きさをもつ石型のガラスブロックを組積させた半透明の空間を構築した。木々の下では隙間から煤々と光の粒が降り注ぎ、教室内は変動的に表情を変える。校舎の横では授業のざわめきの波が微かに聞こえ、運動場の横ではマラソンの足音が地面を伝う。様々な情景を含んだこの長い第二期の教室とも呼べる空間は、義務教育や社会教育といったカテゴリーに当てはめることができない多様な機能を内包するオープンなパブリックスペースである。  
 またパッシブソーラーにより昼間ガラスブロックに蓄えたエネルギーは、夜になると長距離を照らす街灯の役割を果たし、この様に明るい外縁は従来の鉄柵に比べ、防犯機能としても有効であろう。  
 この教室は、確かにその中に閑静な異世界が創り上げられた、地域と学校の隙間に存在する一筋の光である。



関谷学校

関谷学校の石壁に奥行きを体感する。壁としてのみの機能を意識させないその行まいは、石積みにおける重厚感といった単調な印象ではなく、逆に石積みの変動的なリズムにより軽やかささえ感じられる。このリズムを緑の教室にメタファーとして取り入れた。

